

令和3年度 第2回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会 会議録

日時：令和3年9月30日（木）18：00～19：30

会場：豊玉障害者地域生活支援センターきらら 交流室

## 1. 事務局長挨拶

新型コロナウイルスの新規感染者数、重症者も順調に減少し10月1日より緊急事態宣言が解除となる。基本的な感染症対策を継続しながら徐々に行動の範囲を広げ、社協の活動もできることは試しながらやっていきたいと考えている。本日いただいたご意見を参考に第5次計画の推進を進めていきたいと考えている。

## 2. 配布資料確認

## 3. 練馬区地域福祉計画の進捗状況報告

委員長 緊急事態宣言下のため、短時間の開催となり皆さんのお話をゆっくり聞くことが出来ないのが残念だが、後程そういう機会を設けていただくということで本日は時間通りに進めていきたい。それでは練馬区地域福祉計画の進捗状況についてご報告をお願いしたい。

委員 練馬区地域福祉計画は地域福祉活動計画と連携し、計画期間も同様に令和2年度から令和6年度の5年間としている。目標を『ともに支え合う、ずっと住みたいやさしいまち』とし、5つの施策を掲げ取り組んでいる。

計画の取り組み状況の確認については地域福祉計画推進委員会および福祉のまちづくり部会、権利擁護部会という2つの部会を設置して進めている。

推進委員会は施策1「区民との協働と地域の支え合いを推進する」施策2「福祉サービスを利用しやすい環境をつくる」について、福祉のまちづくり部会は施策3「ユニバーサルデザインに配慮したまちづくりを進める」施策4「多様な人の社会参加に対する理解を促進する」について、権利擁護部会は施策5「権利擁護が必要な方への支援体制を整備する」という項目について確認を行っている。

計画期間1年目の令和2年度については、新型コロナウイルス感染症の影響で推進委員会・部会ともに集合での開催が出来ずに年度末に書面開催したのみとなった。

計画2年目の今年度は、令和2年度の実績と課題、令和3年度の取組、令和4年度以降の取組予定について評価を行い、その結果を推進委員会並びに部会に提示し確認いただく予定である。推進委員会ならびに部会は11月に開催予定となっている。推進委員会・権利擁護部会の委員を策定・推進評価委員会の委員をお願いしている。委員会の際はよろしく願います。

取り組み状況について説明する。

施策1「区民との協働と地域の支え合いを推進する」では、地域福祉コーディネーターによる地域福祉の基盤づくりについて、社協に地域福祉コーディネーターを配置して取り組んだ。この他にも地域住民と直接会う機会が減り、地域活動の対応が難しかったと思うが、ネリーズ同士の交流をオンラインを活用するなど様々な形で取り組んでいただいた。

施策2「福祉サービスを利用しやすい環境をつくる」福祉保健相談窓口を調整するコーディネーターの配置については子ども・子育て、高齢者、生活困窮、障害の複合的な課題を抱えた世帯に対して、関係機関が連携し継続的に支援していく。練馬総合福祉事務所に設置したコーディネーターは生活サポートセンターとともに困難ケースのコーディネートに取り組んでいる。

また施策2のもう一つの取組で、生活困窮世帯の自立支援を推進するために令和2年度に開設し

た生活相談コールセンターを令和3年度も継続し、社協と連携して生活相談・特例貸付・住居確保給付金の相談対応をしている。また7月からは生活困窮者自立支援金の支給を開始した。この支援金は総合支援資金特例貸付の再貸付を活用しても、なおまだ生活困窮が続いている世帯などに対して就労による自立を図るため、支援金を3か月間支給する。

施策5「権利擁護が必要な方への支援体制を整備する」については主に社協の権利擁護センターに担っていただいている事業である。成年後見制度利用促進の中核機関として相談支援やケース検討支援会議、利用促進協議会の開催などネットワークの構築を進めていただいている。

また後見人の担い手を増やしていくため、市民後見人の養成研修を開催していただいている。ただ新型コロナウイルス感染症の影響で当初の予定から講座が延期になり、スケジュールを見直して10月から開始していただくなど難しい状況の中で取り組んでいただいている。

その他、今紹介した取り組み以外にも感染症の影響で実施できなかった事業がある。予定通り進まない事業もあるが、工夫しながら取り組み引き続き社協と連携しながら進めていきたい。

委員長 区と社協の連携が沢山必要となっているが、連携は上手くいっているか。

委員 コロナ感染症の影響で難しい状況の中、連携を強化しながら事業を行っていただいている。

委員 総合福祉事務所に配置されているコーディネーターは複合的な課題にすでに取り組んでいるのか。

委員 令和2年度に配置され、複合的な課題についてコーディネートしている。調整・ケース検討会議を開き適切なプランを作成してサービスを提供している。

委員 地域福祉コーディネーターや生活サポートセンターなどと連携するところが多いと思うが、これまで具体的に連携出来たケースはあるか。

委員 実施担当課は別の課になる。具体的なケースについては、今、資料を持ち合わせていない。

#### 4. 第5次地域福祉活動計画の取り組み状況について 【資料1～3】

##### ○第5次地域福祉活動計画 推進評価チームの取り組み

職員 ①ネリーズ通信（チームの取り組み資料、ネリーズ通信20号を基に報告）

ネリーズ通信のチームは昨年度と同じメンバーで取り組んでいる。目的としてはネリーズの気づきの輪を広げ発信力を高めること、このチームで取り組み始めて一年経過しているがネリーズ紹介、ほっこりエピソードの募集や紹介、ネリーズによるかるた紹介など、ネリーズ自身が発信していく形を推進していけるようにチームで取り組んでいる。

9月にネリーズ通信第20号を発行した。特にほっこりエピソードの募集と紹介を始めて3回目となり、少しずつエピソードを投稿するという事が定着してきたが、同じ形で募集をしているとマンネリ化しないか心配であり、常にエピソードを寄せていただく工夫をすることが必要だと感じている。

ネリーズかるたは前回担当の委員が指名する形でリレーしているが、前回担当した委員からは20号でとても素敵なほっこりエピソードを寄せてくださった委員にお願いしたいと意向を伺っているので記事作成をお願いしたい。

委員 ネリーズ通信を毎号楽しみにしている。毎号どのエピソードも素晴らしいが特にびわのエピソードに大変感銘を受けた。後程評価で出てくることだと思うが、社協や行政がイベントを開催したとか何人参加したかということばかりが評価の軸になっていたが、このエピソードは人と人がふれあいつながりあい、相手のことを思い交流したいという気持ちがかき立てられ、その行為にお礼の電話があったということで次の活動に繋がっていくのだろうと想像できるととても素晴らしいエピソードであった。職員には地域住民が自ら行う活動の裏にある原動力やもらったパワーなどをきちんと評価できるのが社協であり、それが住民活動を評価するという事ではないかと伝えたい。

## 職員 ②懇談会（チームの取り組み資料を基に報告）

今年度前半にオンライン懇談会を開催した。事前にオンラインが苦手なネリーズを対象とした勉強会を開催し、11名のネリーズが参加した。6月29日のオンライン懇談会は12名のネリーズが参加し、勉強会からの参加者も多く参加している。今後の懇談会をどうしていくか打ち合わせをし、これまで1年半取り組んできて、オンラインがどのような影響を与えたか振り返りをおこなった。一点目はオンラインだからこそ出会えたネリーズがいたこと、二点目はオンラインという手段を得ることが出来たのは良かったことを確認した。ただオンラインではネリーズマインドを広げるのは難しいという事も確認した。今後できれば対面での懇談会が出来ればいいという話が出ていた。

この話の中でネリーズマインドは何かという話になったが、人と人とのつながりを広げていくことがネリーズマインドであり、できるだけ対面、直接会う中で出てくるものではないかということで、今後は対面で行う努力を試みる予定である。またこの一年半の間にオンラインの良さに気づいたこともあり、オンラインの良ささと対面の良さを生かした形で取り組もうという話になった。対面の懇談会をオンラインで傍聴できる形をとり、ネリーズやネリーズ以外の方にも見ていただくことを検討している。潜在的なネリーズ、登録はしていないがすでにネリーズの要素を持っている地域の方がたくさんいらっしゃると思い、関心のある方に傍聴していただけるような形で開催していけたらと思っている。

また対面で行うときにどこに視点をおいて懇談会を開催するべきか検討しているが、以前委員から多様性が重要だとコメントをいただいた。いろいろな人との出会いがあり、感じる事や気づきがあつてつながりを広げていく大切な要素なのではないかという話があった。いろいろな人との出会いの場を作ることがネリーズ懇談会の肝になるのではないか。いろいろな方がお話を伺う、会場も多様性が広がる場所で懇談会を開催したらいいと考え、委員が代表されている施設を借りて開催したいとお伝えしたところ、委員からも快諾をいただいたと聞いている。対面で開催するため一回あたり参加できるネリーズが少なく、その点をカバーするために3回同じ内容で、日程を選べる形で設定をしているいろいろなネリーズが参加できるような形で整えていけたらと思っている。今の話をもとに目的の部分『様々な部分で人々の多様性を知り、ネリーズマインドを広げながら人と人とのつながりを築いていく』と書き直している。参加した委員からも何かコメントがあればお願いしたい。

職員 皆さんに追いつくのに必死で懇談会の内容については良く覚えていない。

職員 97歳の方ともっとアナログか最先端の技術を追求していくのがいいかで議論していたと記憶している。

職員 オンライン懇談会ではネリーズかるたが出来ないが、普通のかるたのルールではなく、オンラインでもできるルールで実施するのはどうか。たとえば『あ』が5つあるため、読み札をきいてどの『あ』か絵札を当てるなど、ルールの工夫をしてかるたを行うことで、対面ではなくオンラインでもネリーズマインドをどんどん広げていけるのではないかとと思う。

## 職員 ③ホームページ（チームの取り組み資料・作成したかるたの動画を基に報告）

前回の委員会でキーパーソン・ネリーズ・地域福祉コーディネーターの事例紹介動画を作成し見ていただいたが、音楽とイラストがほっこりしていて良いという感想をいただき、一方で字幕が早すぎるとのご指摘をいただき、スピードについては修正しFacebookに掲載した。動画の活用を幅を広げていきたいと考え、災害シンポジウムやボランティアセンターと権利擁護センターで参加した練馬終活フェスタ、権利擁護センターが参加した地域活動団体のイベントのブースで放映

した。特にこの団体は参加者の年齢層が高いということで、社協を身近に感じて欲しいという目的で活用している。

この度ネリーズかるたを紹介する新しい動画を作成した。今後もこのようなシリーズで進めていく予定である。また作成した動画の活用についても検討を進めている。委員からは町の掲示板や区立施設のデジタルサイネージで流したり、自主製品のチラシなど既存の媒体を活用して社協をより詳しく知っていただくために積極的なPRをする工夫をしていくべきだとアドバイスをいただいている。先ほど委員からもネリーズかるたの活用についての意見をいただいたが、既存のメディアを大切にす視点も持っていきたいと考えている。動画を通じて社協をPRし、『社協ならなんとかしてくれるのでは?』と思っただけのような、その入り口になるような広報を、今後広報委員と打合せしながら検討を進めていきたい。

委員 打ち合わせはいろいろなアイデアを出し合えてとても楽しかった。1時間のなかで沢山アイデアが出てきて、もっと話し合いたいと思った。今回紹介したかるた動画が好きで、どんどん活用して続けて欲しい。時折絵札を差し替え期限なく続けるのがいいと思う。そしてかるたの作者・協力者を最後にクレジットとして紹介する事が重要ではないか。ホームページ班のメンバーがとてもやる気があり、いい形で社協のアピールが出来るのではと考えている。

副委員長・委員 ④キーパーソン事例（資料3を基に報告）

委員 これまで「キーパーソンとは何か」という事を委員会でも報告してきたが、キーパーソンチームのメンバー同士が、活動や仕事の意義、思うことが明確化してきたという経緯があった。今回提案したことは、キーパーソンチームで行ったインタビュー形式のキーパーソンとはどういうことなのかということと、これまで「ネリーズ」「地域福祉コーディネーター」は何かという話し合いをしてきた中で、策定委員や職員とインタビューする機会を10月から11月にかけて作っていきたいと考えている。先日インタビューを受ける側とする側と試行してみたが、みんなテーマ以前に自分がなぜこの活動を始めたかというところから話し始めた。脱線はしたもののその人となりを知るきっかけとなり良かったと思う。時間を大幅に過ぎるデメリットもあるため、形式や時間などをあらかじめ設定し、インタビューする側・される側が協力して実施する予定になっている。これまで「キーパーソンとは何か」という事を報告することがほとんどだったが、実際にみんな話し合う事がなかったため、これまで自分のしている活動や仕事やモチベーションなど、今後の方向性などを決めていくきっかけになるかもしれないと思っている。

副委員長 先ほどから話し合う事のエネルギーがわいてくる事例が沢山出てきている。委員のおっしゃったように一方向でなく双方向でやり取りできたらもっと広がるのではないかなと思う。それぞれ自分が考えている地域福祉をお互い聞いたことがないと思っ、話し合うことで第5次計画の推進に寄与するのではないかなと思う。

委員がおっしゃっていた、枇杷が豊作だったことが突き動かしたのかもしれないという事例のように、行動するときは必ず何かに突き動かされ動いていると思う。チームの中で自分を突き動かした相手のことも含めて話していくとどんどん広がっていくということも体験した。

委員 実際にやった方が分かりやすいと思うが、これまで会議の中で「キーパーソンとは何か」という事例を話し合ってきたが、自分たちがキーパーソンである場合もあるし、ネリーズという立場だったり、いろんな立場をみんなそれぞれ持っているところがあり、みんなインタビューすることで明確化していけば地域福祉活動計画の『目指すまちの姿』イメージ図にあるトライアングルを、ただの図ではなく現場のものとして理解できるのではないかなと考えている。実際にやった感想などを次回以降の会議でお聞きしたいと思う。

委員長 インタビュー内容のところに「自分たちの回答を持って臨む」とあるが、もう少し具体的な質問を出した方が分かりやすいと思うが。

- 委員 「あなたにとってのキーパーソンは?」「あなたにとってのネリーズは?」というところから始める方が分かりやすいと思う。
- 委員長 いつから始める予定か。
- 職員 資料に書いてある通り10月から11月で日程調整をする。委員長がおっしゃっていた自分なりの回答を持って臨むと書いているが、「キーパーソンとは何か」という話をしていく中で、その部署でキーパーソンの具体例の話をしていくうちに内容が広がっていたという報告や、策定委員会の中でも「キーパーソンはこういうものだ」という話もあり、さらに委員が事例を積み重ねていく良さを話して下さったので、みんなの中で「キーパーソン」「ネリーズ」「地域福祉コーディネーター」という役割や機能がトライアングルでうまく重なっていくようなイメージ図が出来ているのではないかと思った。そのため「私はこう思っている」ということが、地域福祉に繋がっているのではないかという事を考えていくことで文章化できるのではないかと思った。資料2の「1. 目的」の部分にはじめは「社協はそう考えている」「地域づくりってそうなんだ」と書きつつ改めて「地域づくりって一人ひとりがみんな自分で出来ることをあーだこーだ思いを表現して作っていくことが大事なんだね」と書いている。これは副委員長がことばにしてくださったものである。
- このように、委員と職員が自分が持っている具体的な地域福祉推進像を出すことで、ディスカッション出来たらと思っている。
- 副委員長 実際にインタビューしてディスカッションすると生まれてくるものが大きいと思う。紙だけではなかなかとつきにくい、プレでやったときは話し始めると時間が足りないくらいしゃべってとても面白かった。あーだこーだやるところから生まれてくるものに期待したいと思う。
- 職員 具体的にお伝えしたいが、話の中から出てくるのではないかと期待して敢えて止めている。これまで「キーパーソン」「ネリーズ」「地域福祉コーディネーター」を討論してきた経験上、時間が長くなってしまふという心配がある。プレでやっても時間を限っても超過して話しているので心配である。
- 委員 横文字が多すぎる。若い人は慣れているかもしれないが、「ネリーズ」は老若男女が対象であり、高齢の方には無理だと思う。こういう活動をする方はある程度年齢が高く、「キーパーソン」「ネリーズ」「地域福祉コーディネーター」という言葉は横文字という事でひっかかってしまう。この言葉はいわば「道具」なのに、そこに引っかかってしまう。つまり分かりやすくしないといけない。難しいとは思いますが、高齢の方にも理解できるような表現をお願いしたい。
- 職員 「キーパーソン」「ネリーズ」とカタカナだが、こういう言葉だね、とお互い出し合うところから始めていきたい。私だったらこんな日本語、こんな表現だとか。
- 委員 コーディネーターという言葉も、ピンとくるような言葉に表現して欲しい。
- 職員 枇杷を配って地域の方に喜ばれたように、枇杷を取りにいこうかなどとやり取りをしていることがコーディネーターとか、具体例を基にお伝えする方が分かりやすい。
- 委員 井戸端会議のおせっかいおばさん・おじさんということばが一番理解できる。
- 委員長 キーパーソンチームがどうまとめていくのか、結構大変だと思うが面白いと思うので頑張ってください。
- 職員 どう質問していくか、作戦を練って臨みたいと思う。
- 職員 キーパーソンチームで質問項目を4つか5つくらい準備して臨んだが、なかなか項目が進まなかったため、実際に本番でやる際には4~5つに分かれていた質問項目を合わせたものにしたと思う。キーパーソンチーム内で検討していきたいと思う。
- 職員 ⑤評価（チームの取り組み資料・資料3を基に報告）

評価チームは第5次地域福祉活動計画の評価にあたって今後の具体的な進め方について、職員で話し合いを行い、委員にご意見をいただき、資料3『第5次地域福祉活動計画の評価について(案)』にまとめた。

令和2年度の取り組みは、6月の策定委員会でお示した『第5次計画の取り組み表』でまとめた。今後は、令和4年度中頃の間中評価にむけて、令和2年度以降の取り組みについて評価のための材料を集めていきたいと思う。

評価のすすめ方は前回の策定委員会でお示したとおりである。委員との打合せでご意見いただいたことを踏まえ、評価は実施した取り組みの結果報告にとどまらず、取り組みを通して何がどのように変化したか、次につながりそうなことは何かなどを考え、プロセスを記録し積み上げ、可視化し、住民と共有することを大切にしていきたいと思う。

中間評価(令和4年度中頃)にむけては、「1. 評価のすすめ方」にある「評価の参考にする資料」①～⑤それぞれの具体的な方法・対象を右側に記載したものである。

①策定委員からのご意見、会議録等はそこから評価につながるような意見やキーワードを拾い出す。

②取り組み報告書は、報告書の様式(内容)については6月の策定委員会でお示したが、取り組みの目的・ねらいに対して実施後に課題を挙げ、改善策を考察し、次回に向けた方策を記入する。また、対象とする取り組みは、第5次計画の柱1の取り組みが多いが、ネリーズ懇談会以下、お示した取り組みで、ご参加いただいた地域の方の意見や声の実施前と実施後の変化を拾う。

③アンケートは、地域向けの講座のアンケートで、「福祉や地域への関心が高まったか」の設問を設けて、講座受講前後の変化を分析する。

④第5次地域福祉活動計画推進の戦略チームの取り組みでは、エピソードやプロセス、具体的な事例を集め、取り組みによる地域の変化や成果を戦略チームと一緒に考えていく。

⑤第5次地域福祉活動計画取り組み表は、第5次計画P43、44に示されているもので、6月の策定委員会で昨年度の取り組みをまとめたものを示している。

年度の取り組みのまとめだけでなく、特に柱2の取り組みについては相談に迷う人をどう相談につなげられたか、どれだけの人を巻き込み連携できたかなどのプロセスがわかる取り組みを事例として見える化したいと思う。また、白百合・かたくり福祉作業所の当事者の力を活かし障害理解に関わる取り組みについては、参加した小学生などの感想を質的評価に活用したいと思う。

計画策定時には想定していなかったコロナ禍を経験し、それによって失われたものや新たな課題について共有しながら、活動計画後半の推進にむけた見直しに反映させていきたいと考えている。

委員 評価は出来た・出来ない、どこまで進んだかというチェックになりがちである。地域福祉活動計画が練馬区社協にとってどういう位置づけか、常に地域住民とともに確認していくプロセスが一番大事である。いろいろなチームでかたるたの活用の仕方やインタビューというアイデアがある。アイデアによって人とどうつながるかが評価や成果になっていくと思う。評価の軸をどう作り上げていくというのが一番難しいところだが、作り上げていくというプロセスが非常に大切で、第5次では出来ていると思う。どれだけ人とかかわりあえたのかという視点や、理解にどう結びついたのかをお互い確認し合い、委員会はもちろんそれぞれのチームの活動で活かしていくように循環を作っていければと思っている。

委員 評価の方法について大事にしなければならないのは「ひとりの不幸も見逃さない」「つながりのある地域を作る」の二つの命題を計画の中で掲げてきているため、どんな遠い道のりでもたどり着くために、そこへ向かっているという事を確認できればいいと思っている。今実施していることを可視化してできれば住民の方々に社協が実施していることを示せばいいと思っている。今作っているいろいろな評価の指標を住民に見えるように加工していく。気になるのは順調に行き

つつもコロナなど新しい課題や、コロナで止まっていることを確認することが必要である。娘は白百合福祉作業所に梅干しを買いに行くと「どじょうつかみはいつ再開するの?」と聞いていて、2年間どじょうつかみが行われていないが、白百合の庭に小学生があふれている光景を取り戻そうとする気持ちが大事だと思う。

委員 先日感想を依頼され簡単な報告やまとめを考えたが、それだけではどうやっていいのかわからなくなってきたというのが一番の感想だった。まとまったものではなくエピソードなどをもっと聞かせていただけたらもっと気の利いたことをいえるのだが、情報収集がまとまってくれば評価をどう考えたらいいのか自分の中で整理できると思う。評価担当として今の段階ではどうしていいのかわからないのが自分の想いである。エピソードや事例の集積などを進めていけばいいと思う。みんなの話をきいてそんな方向がいいと思っている。

委員長 来年度が中間の評価の年度になると思うが、質問・提案はあるか。

委員 計画を進めていくうえで、委員のお話は大切だと思っている。事例を見せられると良くわかる。そういう事なのかと。小さい頃はいたずらばかりしていて、枇杷を見た瞬間その時の気持ちもたげてきてバケツ5杯取ってしまった。捨てるわけにもいかないから子供連れのお母さんにも配り、先輩たちにも配った。いたずら心が動機づけになっているのに意外にみんなから評価されてびっくりしている。このように事例を用いたほうがネリーズ・キーパーソン・コーディネーターを説明しやすいと思う。

職員 ご本人が「ネリーズ」「キーパーソン」と気が付くために事例を出してもなかなかご本人は気づかないことが多い。

委員 コロナの中での社協の活動の様子を聞いていると、給付金等の窓口の業務などで職員は大変だと思う。日常業務の中で計画を推進していくというのは大変である。それを含めて計画の見直し、計画の組み立て方を考えていくことが必要だと思う。

職員 計画の組み立て方というのはどういう意味か。

委員 具体的なものがあるというわけではないが、社協の中で業務の整理というのも含めて考えていただけたらと思う。5月頃の評価の打ち合わせの中で、計画を策定した時よりコロナで状況が変わってきたので活動計画の捉え直しをしてもいいと思っている。エピソードを集めるという事も大事だが、社会状況の変化も含めて計画の在り方を考えるという事が必要だと思う。

委員長 コロナで出来たこと・出来なかったことがいくつもあると思う。

副委員長 委員がおっしゃったことは、今職員が各業務でもとても忙しい中、活動計画のそれぞれのチームに入っていてこなしていることが負担になっているのではないかとということか。

委員 それもある。そのあたりどうなのかと。

副委員長 私もそう思ったりもするが、チームの話し合いが業務に反映していくような循環もあるのではないかと。

職員 キーパーソンチームのことを言えば、部署でチームで話し合ったことを持ち帰ってまた議論して自分が思っていた意見と違う考え方で他の職員が受け止め、いろいろな意見が出て、それをもってまたチームの打ち合わせに行くというようなやり取りを積み重ねていくことが出来、部署としてもいい経験をさせていただいていると思う。

副委員長 負担も大きいがそういうメリットもあると、他のチームの報告を聞いていて思った。他の職員の報告を聞いてみないと解らないが。

委員 骨格で論理的に第三者にもきちんと説明できるような資料が必要だと思う。ほっこりエピソードではないけれど、ネリーズみんなが自動的に活動することが理想だが、理解してもらってもなかなか動き出すことが難しい。みんなが世の中のエンジンを動かすということは難しいということである。ネリーズひとりひとりがエンジンをもってやろうという気にさせるのは難しい。

委員長 そのためにも解り易く、説明していく、提示していく。この資料には案がついているが、この案で評価を進めていくという事によろしいか。

## 5. まとめ

副委員長 コロナの状況でそんなに動いていないと思っていたが、報告を聞いていて各チームが結構動いているという事を知った。第2次計画から参加しているが、今大変な状況の中で、職員は自分の持ち場の仕事が大変であるにも関わらず、各チームのことをやることで、職員の力が大きく付いていると思う。みんなコーディネーターとして動いていることと思うが、本当にすごいと思っている。負担になっていないか心配であったが、報告を聞いているとチームの取り組みが循環されて自分の部署にも還元しているとあらためて知らされた感じである。

第5次計画まだまだ半ばまで来ていないが、今後もこのような形で推進していけたらと思う。

## 6. その他

①かたくり自主製品取扱店紹介

②ぼけっと

## 7. 次回の日程について

日時：令和4年2月7日（月）18:00～を予定

以上